

# アイサップ ニュースレター

第6号

2008年4月15日発行

ISAPHはラオスとマラウイの母親と子ども  
たちの保健の向上を支援しています



NPO International Support and Partnership

写真：モバイルクリニックに集まる村人たち



## ISAPH ラオスプロジェクトの視察を終えて

聖マリア病院のご支援により特定非営利活動法人 ISAPH も今年で 3 年を迎えました。ISAPH の活動の中心は、ラオス国カムアン県におけるコミュニティを対象とした母子保健プロジェクトで、来年は新たな展開を目指し新プロジェクトの立上げの時期を迎えます。この度、新プロジェクトの立上げ準備に関わる諸機関との調整とプロジェクトの視察のため、小早川 ISAPH 理事長に同行しラオスに出張しました。

首都ビエンチャンでは、当 ISAPH の次期プロジェクトの宣伝も兼ねた支援依頼のため、JICA ラオス事務所関係者との会合、日本大使表敬、ラオス保健省高官との打合せなど行い、その後は、プロジェクトの活動地域であるカムアン県に入りました。県・郡保健局職員との次期プロジェクトの打合せ、モバイルクリニック活動の視察、NGO 機関や国際援助機関で活動している日本人との意見交換、更にプロジェクト内部での業務調整と朝から晩まで盛り沢山なスケジュールでしたが、その分収穫も多くありました。

日本で頭に描いていたプロジェクトの様子がより立体的に見えるようになり、度々現地側との意見に齟齬を来たした原因も理解できたように思います。また、モバイルクリニックの視察では、ISAPH スタッフと郡保健局のカウンターパートの活動に多く参加するにこやかな母親の姿から、これまでの努力で築かれた信頼関係を肌で感じるこ

とができました。

そしてもう一つ嬉しいことがありました。同地区において多発していた乳児死亡でビタミン B1 欠乏症が疑われ、聖マリア病院国際協力部の協力の下ビタミン B1 の調査を 2006 年 11 月に実施したのですが、その調査結果の中で、母親のビタミン B1 の数値が異常に低い乳児がおり、調査を担当した国際協力部の中野先生からの指示で、ISAPH スタッフが、その子どもの家に様子を見に行きました。その子は、ビタミン B1 欠乏のみならず骨と皮ばかりの重度な低栄養状態に陥っており、即、郡病院に運び治療を行いました。

その後、辛うじて命は取り留めたとの報告を受けていたのですが、その親子が今回のモバイルクリニック活動の発育健診に元気に参加していたのです。その親子を紹介され、挨拶を交わした時のお母さんの笑顔が今も忘れられません。子どもは以前の状態が想像できないくらい健康に育っており、その親子の姿をみて、ISAPH の存在意義を強く感じる事ができました。これからも、一人でも多くの人々の笑顔のために頑張りたいと思います。  
(ISAPH 事務局担当 磯 東一郎)

## プロジェクト評価会議を開催

ISAPH の人材交流活動の一環として、平成 19 年 7 月 26 日にカムアン県副知事オダイ・スーダーホーン氏と同県保健局運営部長カンケオ・ランサワットの 2 人が聖マリア病院を訪問され、ISAPH および聖マリア病院国際協力部のスタッフとラオスプロジェクトの合同評価会議を行いました。会議では、ISAPH 活動の成果が報告されるとともに、第 2 フェーズに向けた今後の活動の継続が強調されました。また、ビタミン B1 欠乏による乳児死亡の改善を図るために県として積極的に取り組む姿勢が示されました。



ラオスのカウンターパートと合同評価会議を行いました

## 「JICA 草の根技術協力事業」の採択が内定

ISAPH では、ラオスの活動地域でより一層の地域保健の向上をめざして「生き生き健康村づくり」をテーマとする「草の根技術協力事業」の実施計画を JICA に申請し、このほど、その採択が内定しました。今後、来年第 4 半期からの開始に向け、より詳細な計画の策定とラオス保健省との協議などに積極的に取り組んでいく予定です。この協力事業が大きな成果を生むよう周到に準備を進めていきたいと考えています。



ISAPH によるラオス中部のカムアン県でのプライマリヘルスケアを中心としたコミュニティ活動は、活動開始から3年を経過し、第1フェーズをほぼ終了しました。県や郡の保健局や対象地域の要望に応えつつ、また聖マリア病院による支援の下、充実した活動が実施されてきました。具体的には、3つの成果目標（①村の保健ボランティアを介して母子保健活動の基盤ができる、②村の保健ボランティアに対するヘルススタッフのサポート体制が整う、③健康の保健指標となる情報収集ができるようになる）を達成するために、郡保健局スタッフとともに地域保健ボランティアの研修を通じて保健活動を推進し、乳幼児の発育測定、予防接種の実施管理、栄養教育など子どもの健康の向上に努めてきました。今後は、郡保健局が主体となって活動が継続できるよう体制のより一層の強化を図ることが必要と考えられます。

第2フェーズの活動は、ほぼ計画がかたまり、カンペータイ地区とカシ地区において、これまでの郡保健局職員と保健ボランティアを中心とした活動を継続する予定です。また、シーブンファン地区では、これらの活動に加えて、ビタミンB1欠乏にともなう栄養問題や不衛生な生活習慣の改善に向けた栄養・衛生教育活動を計画しています。

## モバイルクリニックの活動を開始しました

### モバイルクリニックの研修を実施



スントーン先生

ISAPH Laos では2007年6月よりセバンファイ郡シーブンファン地区3村とカシ地区3村でモバイルクリニック（移動診療）を実施しています。実際に実施していくうちにいろいろな疑問点や問題点が出てきます。そこで、ラオスにおけるプライマリヘルスケアの専門家であるスントーン先生を講師にお招きして研修を実施

しました。

スントーン先生はモバイルクリニックと健康教育の計画、実施、評価方法や住民の興味を引く健康教育時の話し方などをコメディアン顔負けの語り口調で進めていかれます。研修生たちは居眠りする暇もなく、笑いながら、しかし確実に疑問点を解消していったようです。

研修の中には、実地研修も含まれていましたが、村の人たちも先生の話や夢中で聞いています。モバイルクリニックのチームメンバーも、楽しいと住民は話を聞く記憶にも残り、また協力も得られるのだということを実感できたと思われま

す。こうして現在、私たちは住民と一緒に歌って踊るモバイルクリニックチームとなっています。もちろん診療もちゃんとやっています。

(ISAPH Laos 篠原久美子)



モバイルクリニックで郡保健局スタッフが衛生教育をしています

### サイニャブリ県のモバイルクリニック活動を視察

サイニャブリ県では、Save the Children Australia のサポートのもとに、16年前からモバイルクリニック（移動診療）を実施し、成果をあげています。そこで3月2日から7日まで、ISAPH メンバー3人とセバンファイ郡モバイルクリニックチームのメンバー4人でサイニャブリ県



の活動を視察することになりました。

場所はパクライ郡ポーン村、到着すると村中の人たちが来ているのではないかとという盛況ぶり。



サイニャブリ県パクライ郡保健局のスタッフとともに

その中で混乱もなく淡々と診療が進んでいく。「偉い先生が来てくれたから健康診断だよ」と。村人たちは自分たちの健康に対する意識が高い。ふと周りを見渡すと村の中もなんだか清潔。家畜の糞やゴミが落ちていない。これが16年間のモバイルクリニックと健康教育の成果なのだろうか？

視察メンバーもそれぞれ、モバイルクリニックメンバーや村長、村人たちに質問をして、私にいちいち報告に来る。「すごいぞ、この村には衛生状況を調査する台帳がある」「ビタミン剤は無料じゃないそうだ」などなど。「この村は子どもの人数を把握してないぞ、うちのほうがいい！」など悪い点まで…。

いろいろな情報交換をすることでお互いのモバイルクリニックチームにとって実り多い視察となりました。(ISAPH Laos 篠原久美子)



モバイルクリニックでパクライ郡保健局スタッフが診療をしています

## 乳児脚気対策で実施している母親へのビタミンB1投与のフォローアップ

ラオスでは母親のビタミンB1欠乏により乳児に脚気が起こり、そのために多くの乳児が死亡することがISAPHの調査で分かりました。現在、ISAPHでは乳児死亡の多い地域で母親にビタミンB1の投与を行っています。その結果は、現在検討中ですが、今年の2月に現地を訪れる機会があり、郡保健局から結果の一部を聞くことができましたので報告します。

2007年1年間を通してシーブンファン地区では、81人が出生、9人の乳児が死亡し(11.1%)、死因はすべて乳児脚気が疑われました。この9人のうち、母親へのビタミンB1投与前



モバイルクリニックで1カ月分のビタミンB1が投与される

の死亡は6人であり、投与後の死亡は3人で、すべて中地ラオ族でした。なお、死亡した乳児と母親へのビタミンB1投与の有無や服薬の状況など詳細な関係は現在検討中です。

また、2007年には4人の乳児脚気と思われるケースが郡病院に来院し、いずれもビタミンB1の急速投与で回復しています。この事実は、ISAPHによる乳児脚気に関する活動にともなう成果と考えられ、乳児脚気の予防と治療のためにはコミュニティ活動が重要であることを示しているといえます。(聖マリア病院国際協力部 中野博行)

## ラオスのナショナルスタッフ紹介

サイサモン・サイサナボンマー(通称:モン、セバンファイ出身、24歳、女性)。2003年に看護学校を卒業し、セバンファイ郡保健局に無給職員として勤務していました。ISAPH設立当初から、フィールドワーカーとして母子保健活動に従事しています。VHV(village health volunteer)、ヘルスセンター職員、県・郡保健局職員と協力して出生児登録、成長モニタリング、モバイルクリニックなどの活動をしています。これからは住民との話し合いなどを深めて村落の組織強化や健康教育を充実させたいと考えています。





## ラオスでスタディツアーとフィールド研修を実施しました

ISAPHでは活動の開始以来、国外のみならず国内の人材育成が重要な課題と考えています。昨年度に引き続いて、今年も臨床研修医制度「地域保健コース」の研修の一環として、3人の研修医がラオスにおけるフィールド研修に参加しました。また、今年度は、聖マリア病院国際協力部が主体となって計画した初めてのスタディツアーにISAPHが協力し、実施することができました。このほか、東京女子医大の学生によるスタディツアーの実施にも協力と支援を行いました。

### 聖マリア病院のスタディツアーを受け入れ

今回のスタディツアーには、聖マリア病院国際協力部高岡宣子先生の指導のもと、4人が参加しました。参加メンバーの1人である田中準一さんの感想文が聖マリアグループ報「ルルドの聖母」No.63に掲載されましたので、その一部を抜粋して再掲いたします。

#### 「国際協力の難しさ、面白さ知る」

世界には、予防接種を受けることができない子どもたちがいる。そのことは知識として知っていましたが、実際にリアルなものとして感じることはできていなかったように思います。しかし、今回のスタディツアーに参加して、日本では実際に見ることができないEPI（expanded program on immunization：拡大予防接種計画）の活動に同行し、その現実を目の当たりにすることができました。普段、本でしか学ぶことができないようなこの活動に同行できたことは私にとって非常に貴重な経験となりました。経済的に貧しく、社会生活



カムアンにある市場を散策中

基盤が整っていないラオスにおいて、予防接種が必要な子どもたちにもれなくワクチンを届けることが、どれほど困難なことであるのかがよくわかりました。（聖マリア病院 ICU・CCU 田中準一）

### 聖マリア病院臨床研修プログラム「地域保健コース」のフィールド研修

ラオスはタイの東隣に位置する内陸国で人口565万人、面積23万6,800km<sup>2</sup>、公用語はラオ語、宗教は90%が仏教、およそ50の民族を有する多民族国家です。ラオス自体は世界の中でも最貧国に分類されますが、住民の生活はというと、一概に貧しいとばかりは言えない、というのが今回のフィールド研修で得た私の率直な感想です。



稲熊先生

国民の生活ぶりには地域較差があり、首都であるビエンチャンと今回調査をしたカムアン県では物質的な豊かさが大きく異なっていました。また、同じカムアン県内の村でも土地の肥沃さや生活水の得やすさ、他の村との交流の有無などにより、食物の充足度、生活の豊かさが異なり、それが人々の体格や衛生状態に反映されているのではないかと思います。

しかしそんな中、ある程度衣食住が満たされ、健康問題も抱えていない村では、たとえ便利な生活ではなくてもおしゃべりや笑顔にあふれていて日々の生活を楽しく過ごしていることがとても印象的でした。のどかに時間を楽しんでいる、といった雰囲気です。物質的豊かさと人間としての幸福はパラレルではない、という事を実感させられました。今後村の生活が発展しても人と触れ合いや楽しく過ごすという生活習慣を失わないでほしいと思いました。（臨床教育本部 稲熊容子）



## ラオスってどんな国？ (2)

### 街中の日常生活

ラオスでは街中と村落部での生活状況は大きく異なります。



炭は生活の必需品；炭を売り歩くおばちゃん

私たちは現地駐在員も普段はタケク市という県庁所在地に住んでいます。電気・水道はほぼ完備し（停電・断水は日常茶飯事です

が…）、携帯電話も普及しています。中流家庭では、TV、冷蔵庫も普及しています。しかし、洗濯機をもっている家庭は少なく、みんな手洗いしています。あまり搾らなくても日差しが強いのであつという間に乾いてしまうので問題ないようです。掃除機は大きなオフィスでしか見たことがありません。埃が多い国なので掃除機で吸い込んでも全て吐き出されてあまり意味がないのかもしれない。



食堂は家の軒先で営業する；近所のうどん屋さん

プロパンガスはあるのですが、ラオス人は怖が

って使いたがりません。外国人相手の大きなレストランでも厨房を覗くと炭火で調理しています。

貧乏だ！貧乏だ！と嘆いているラオス人も一家に一台、または一

約30年前まではフランスの統治下でフランスパンが絶品。サンドイッチや練乳をつけて食べるのが主流



人一台バイクを持っており、通勤、通学（小学生も）に使っています。歩いて5分の距離でもバイクを使います。お金が無いのならば徒歩や自転車でもいいのではないかと思うのですが、それは「疲れる！かっこ悪い！」のだそうです。自転車に乗っているのはほぼ外国人だけ、といってもいい状態です。車の普及も急速に進んでおり、首都ビエンチャンでは、2～3年前まではありえなかった交通渋滞が起こっています。「交通ルールはあつて無きが如し」のラオスですので、もちろん交通事故も多発しています。

### 街中にある家

街中の家はコンクリートの洋風の家が増えてきています。といつても、耐震性は全く無視。煉瓦を積み上げそれにセメントを塗りつけた



雨漏りのするわが家

けの家なので、もし大きな地震でもあれば被害は相当大きなものになるでしょう。地震が無い（と

信じている）国だから大丈夫なのでしょう…？

でも、私が借りているのは、ラオス風の高床式家屋（耐震保障なし）で、風



わが家の応接間…というよりベランダ？

通しがよくエアコンがなくても快適です。というか、ほとんど気分はアウトドア生活です。（ISAPH Laos 篠原久美子）



毎日炭火で料理しています





## インフラの整備は進んでいますが医薬品が不足しています

ISAPHが支援しているアフリカ・マラウイのムジンゲプロジェクトについては、前回の訪問時から目立った動きはありませんでしたが、4月1日に現地プロジェクトの管理・監督を依頼しているチャリティさん（写真左端）より連絡



ムジンゲプロジェクトのメンバーとプロジェクトを支援するムジンバ県病院のスタッフ（右端が病院長）

が入りました。

それによると、プロジェクトとISAPHではムジンゲ地域を管轄しているムジンバ県病院長兼保健部長に対し、ヘルスポスの備品整備と職員住宅の完成をお願いしていたところ、ようやくその予算が認可され、まもなく機材が届く予定とのことです。それらの予算額は全部でおよそ20万クワチャ（約17万7千円）となります。

また、これとは別に、この地域ではコミュニティの保健スタッフが子どもの生存の向上を図るために、子どもの病気の統合的治療（IMCIといいます）の研修をすでにうけているので、このIMCIを有効に実施する上で必要な医薬品の提供もお願いするつもりでいます。しかしながら、医薬品の供給については、予算が十分でないため今回は見送られるようです。ISAPHとしては、これらのIMCIの実施に必要な医薬品の供給を含め、今後どのような支援を行うのがよいか、検討していきたいと考えています。

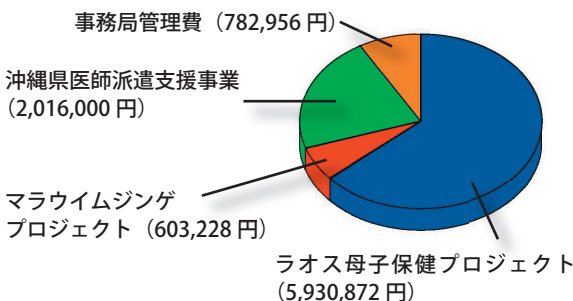
## ISAPH 総会・理事会の開催と平成 19 年度の収支報告

平成 20 年 3 月 29 日に ISAPH 総会・理事会を開催しました。総会議案は、平成 19 年度事業実績概要報告であり、理事会議案は平成 19 年度の収支見込報告と平成 20 年度暫定予算でした。また、報告事項として、聖マリア病院への資金援助依頼、JICA 草の根技術協力の採択内定、渡部和男理事の

ご退任が挙げられました。

平成 19 年 4 月 1 日から平成 20 年 1 月末までの収支は、前年度繰越金が 19,569,262 円、会費および寄付による収入が 2,034,218 円、沖縄県医師派遣支援事業費が 2,016,000 円で収入合計は 4,050,218 円でした。支出は、下図に示した通りで、合計 9,333,056 円となり、収支残高は 14,286,424 円となりました。

### 平成 19 年 4 月 1 日～平成 20 年 1 月 31 日の支出内訳



### 渡部理事が ISAPH をご退任

平成 18 年 5 月より ISAPH 理事に就任されていた渡部和男神戸大学教授がこのほど任期満了にともない、ISAPH 理事をご退任されました。渡部理事には、ラオス・タムライ村のヘルスポス建設などでいろいろとご尽力いただき本当にありがとうございました。



## ISAPHの歩み

2007年7月～2008年3月

- 7月22～29日  
ラオス国カウンターパートの2名が訪日、ISAPH および聖マリア病院国際協力部とラオスプロジェクトの合同評価会議を行う
- 8月13～17日  
東京女子医大の「ラオス国スタディツアー」を受け入れ
- 10月8日  
第22回日本国際保健医療学会で「ラオスの乳児脚気」をテーマに発表（大阪）
- 10月23～24日  
グローバル・フェスタに参加（東京）
- 11月13～17日  
聖マリア病院職員を対象とした「ラオス国スタディツアー」を受け入れ
- 1月11日  
齋藤智子職員が足立区立第11中学校で「国際協力の現場からのメッセージ」のテーマで講演（東京）
- 1月14～18日  
セバンファイ郡保健局スタッフを対象とした研修を実施（ラオス）

- 2月11～19日  
聖マリア病院臨床研修プログラム「国際保健コース」のフィールド研修を受け入れ（ラオス）
- 3月3～4日  
サイニャブリ県保健局モバイルクリニック活動を視察（ラオス）
- 3月6日  
「JICA 草の根協力事業：生き生き健康村づくりプロジェクト（ラオス）」の案件が内諾される
- 3月29日  
平成19年度ISAPH総会・理事会を開催
- 3月31日  
渡部和男理事が任期満了でISAPH理事をご退任

## 入会と寄付のお願い

ISAPHの活動を発展させるために、一人でも多くのご入会、ご寄付をお待ちしております。

### 法人会員

入会 30,000円 年会費 30,000円

### 一般会員

入会金 3,000円 年会費 3,000円

入会ご希望の方、ご寄付をお願いできる方は、下記東京事務所までご連絡いただければ幸いです。

## ISAPHの役員名簿

役職	氏名	備考
理事長	小早川隆敏	東京女子医科大学教授
理事	深見 保正	元福岡県企業管理者
理事	湯川 武	慶應義塾大学商学部教授
理事	浦部 大策	聖マリア病院国際協力部
理事	樋口 敬記	内山緑地建設株式会社代表取締役会長
監事	竹之下義弘	弁護士（東京六本木法律事務所）

特定非営利法人 ISAPH 東京事務所

〒105-0004 東京都港区新橋 3-5-2

新橋 OWKビル 3階 NPO 法人 ISAPH

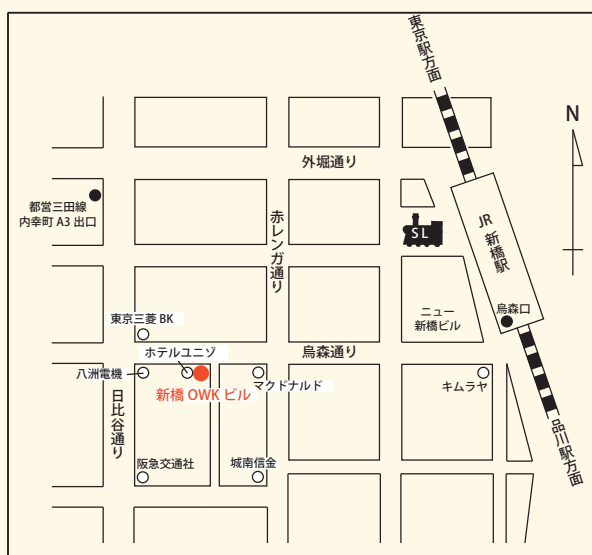
TEL 03-3593-0188 FAX 03-3593-0165

E-mail [tokyojimusho@isaph.jp](mailto:tokyojimusho@isaph.jp)

URL <http://isaph.jp/index.html>

振込先

郵便振込 口座名 特定非営利活動法人 ISAPH  
口座番号 00180-6-279925



ISAPH Newsletter 第6号 編集スタッフ  
磯東一郎 楨村さおり 中野博行